4　室町・戦国時代

三浦道寸と新井城

1333年、後醍醐天皇の呼びかけに応えた新田義貞や足利尊氏に執権北条高時が倒されて鎌倉幕府が滅び、時代は室町・南北朝時代へと移りました。このようななかで、三浦氏もいろいろな中央勢力と結びつきながら、相模国の守護職と所領を確保してきました。新井城が小網代・油壺に築かれたのはこの頃だといわれています。

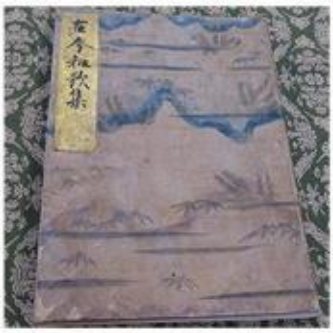
室町時代後期、新井城主である三浦時高（義明より11代目）には子どもがなく、関東管領上杉氏と小田原城主である大森氏の娘との間に生まれた義同を養子に迎えました。ところがその後時高に実子が生まれたため、義同は母の実家の小田原に戻って出家して道寸と名乗るようになりました。

北条早雲と三浦道寸の城

（編集委員作成）

しかし、「三浦氏を継ぐのは道寸である」とする道寸の家来が多く、道寸も意を固め、1494年に義父の時高を新井城に攻めて時高父子を自殺させてしまいました。こうして道寸は新井城の城主となり、三浦氏を継ぐことになりました。応仁の乱を経て戦国時代に突入していた頃のことです。

この頃・伊豆国から相模国にかけて力を伸ばしてきていたのが北条早雲です。早雲は小田原の大森氏を倒し、相模国さらには南関東全体に勢力を伸ばそうとしてきました。これに対して道寸は新井城を子の荒次



圓照寺 三浦道寸の写本
（古今和歌集）

（編集委員撮影）

郎義意にまかせ、相模国中央の岡崎城（現在の伊勢原市　小田原厚木道路平塚インター脇の平城）で早雲を防ごうとしました。しかし、早雲は岡崎城を破ったうえ三浦半島の入り口の住吉城(現在の逗子市　逗子マリーナ裏側の山城)をも陥れました。道寸は最後のとりでとして、自然の地形に恵まれた新井城にたよらなければならなくなったのです。

新井城は、東西から深く谷の切れ込んだ引橋を大手(城の正面)とし、その南側全体を１つの城と構想した大規模な中世の城で、その中心は小網代の半島の先(現在の東大臨海研究所となっているあたり)と考えられています。三方を海に囲まれた崖の上にあり、遠くは大磯や小田原まで見渡せ、物資の補給も容易な新井城。しかも、城内の千駄やぐらには 2000 俵もの米が貯えてあったといわれています。「ここにたてこもれば…」と、道寸父子は考えたのでしょう。

一方、早雲の軍は引橋の手前にあたる菊名の陣場原に陣どり、持久戦となりました。道寸の期待した援軍は、早雲の軍に打ち破られて三浦まで到着できません。３年間の籠城で、兵糧も尽き果てました。ついに道寸父子は、ここを最後の戦いと覚悟を決め、激しい戦いのなかで 75 人の味方と共に自決した(1516 年、一説には 1518 年ともいう)と伝えられています。

油壺の名は、この戦いで湾一面が血潮で染まり、まるで油を流したかのような状態になったことから名付けられていると言われています。

現在の引橋（編集委員撮影）

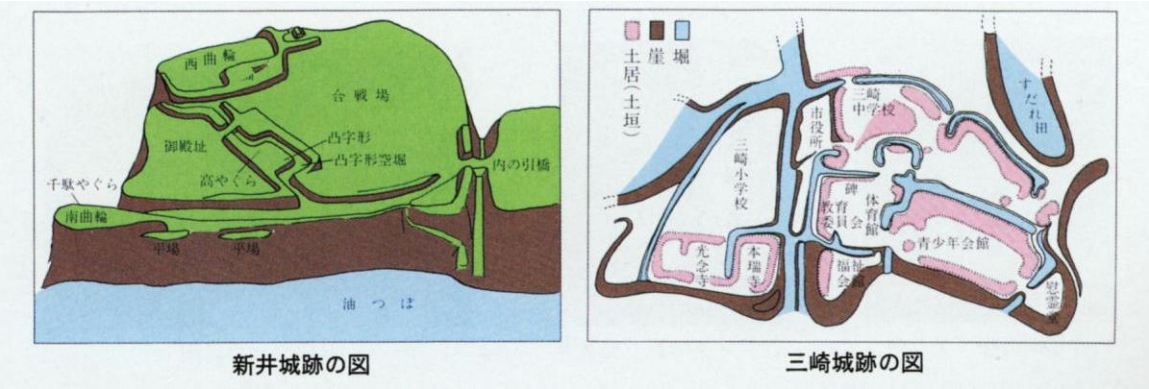
新井城内より出土した冑の一部

＜東大臨海実験所所蔵＞

（三浦市撮影）

道寸の一部の家臣は、その後もしばらく城ヶ島(将ヶ島)に立てこもって抵抗しましたが、後に北条水軍として組織されました。安房里見氏の三浦半島攻撃に対して、三浦を守った三崎十人衆はこの人たちです。三崎城(三崎中のまわりに土塁の一部が残っている)の時代が始まったのは、この頃だと言われています。北条湾の名が残ったのも、こうしたいわれからなのでしょう。また、上宮田には、土地の豪族の松原新左衛門が浜で火をたいて、里見軍と戦う北条氏綱(早雲の子)を嵐の海上から救ったという話も残っています。

三浦氏を破った北条氏は、相模国をまとめる戦国大名となります。そして、駿河の今川氏や甲斐の武田氏などと相争うとともに、検地などを通して一段進んだ領国支配を完成させていくのです。



新井城跡の図　　三崎城跡の図

(編集委員作成)

荒次郎の首

新井城の落ちるとき、荒次郎は自ら首をかきおとした。その首は、早雲の城のある小田原に飛んで海岸の松の木にかかり、生首のまま3年もあった。いかなる名僧に供養を頼むも死なず。あるとき道寸が出家した総世寺の中室和尚が、「現つとも夢ともしらぬひとねむり　浮世のひまを曙の空」と一首詠むと、たちまち白骨となったという……。　この伝説は、小網代の海蔵寺の絵馬に描かれたものですが、このほかにも新井城落城の話は江戸時代の講談などによく登場したようです。

5　江戸時代

海上交通の発達と三崎

1590年に相模国の北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされると、関東全域が秀吉によって徳川家康の領地とされ、三浦半島も徳川氏の支配するところとなり、三浦の水軍も徳川氏に引き継がれました。

さらに1603年、家康が江戸幕府を開いたことから江戸が全国の中心地となると、江戸湾入り口の重要地点にあたる三崎は幕府が直接治める天領となり、幕府の旗本向井正綱やその子の忠勝などが船奉行として海上を行き来する船を監視するようになりました。

今でも見桃寺(三崎)には、正綱はじめ向井一族の立派な墓が残っています。

江戸幕府が安定期を迎えると三崎は、軍事上ばかりでなく商業・交通の面でも重要性を増してきました。三崎に奉行所や代官所が置かれ、海の関所として「廻船」(沿岸行路の運送船)の荷物改めとともに、「船泊り」(船の風待ちや潮待ちをする)や廻船問屋を通して物資の移出入も多く行われるようになってきたのです。この時代の三崎は、浦賀とともに三浦半島で最も栄えた“町”として発展していったのです。

海上交通の増加にあわせて航路の安全もはかられました。安房ケ崎(城ヶ島)には物見やぐらとして「のろしだい」が作られ、種々の合図に使われました。

向井正綱の像＜見桃寺＞

（拝観の場合は要連絡　三浦市撮影）

向井一族の墓＜見桃寺＞

（三浦市撮影）

1678年には幕府によって今の灯台のある西山(城ヶ島)に、魚油を用いた行燈式の「灯明台」が建てられました。しかし、余り明るくないということで、1720年に松薪をたく「かがり屋」となって1870(明治3)年まで続き、現在の洋式灯台へとつながったのです。

※かがり屋…篝屋守護の詰め所。そこに詰めた武士。のちに鎌倉にも設置された。夜間辻々でかかり火をたいたからいう。

漁業の発達

三方を海で囲まれた三浦では、昔からボウチョウ(見突き)などの原始的な漁業が行われ、近隣の人たちに海の幸を供給してきました。

江戸時代に入ると全国的な商品経済の発展のなかで、三浦でも江戸や大阪の大消費地に対して大量に獲って大量に売るという形の漁業が発展してきました。紀伊(和歌山県)地方から移住してきた漁民によって行われた上宮田周辺での「マカセ網」は、このような漁業の典型です。

江戸時代以前より関西地方の漁民は、上方(京都や大阪)で大量に売れる「干鰯」(綿花栽培の肥料としてその頃から使用される)の原料となるイワシの漁場を求めて、関東地方まで進出してきました。そして、江戸時代の中ごろ、紀伊の下津浦の漁師たちも三浦半島下浦地方に移住し、「マカセ網」という大型の網でイワシを獲るようになったのです。

この漁法は魚群の来るのをじっと待つのではなく、何艘もの船でイワシを取り巻いて獲る巻網で水揚げも多く、三浦の漁師にも大きな影響を与えたと考えられています。獲れたイワシは「干鰯」として上方へたくさん送られました。

十劫寺のマカセの墓（編集委員撮影）

今でも上宮田のいくつのお寺には、当時の移住民である「マカセ」の人たちの墓があり、「マカセ井戸」と呼ばれる井戸も残っています。

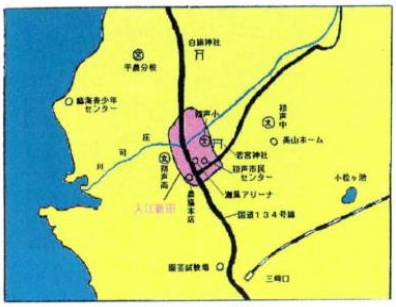
また、この時代、江戸でも武士のための魚(肴)を出す場であった「肴場」が城下の庶民のものとして発達しました。江戸の魚問屋や地元の有力な魚商が村で魚を買い(「生簀上げ」－なかには沖まで出て漁師の魚を直接買う「出買い船」などもあった)、江戸の市場に並べたのです。このような流通機構の整備がさらに漁業生産を拡大し、魚種を増やしたり新しい漁法の開発を進めました。また、鮮魚を江戸まで届ける高速船の「おしょくり船」(押送船)もさかんに利用されました。

このようにして、三浦の鮪・鰹・鯛・スバシリ(ぼら)・イナダ・鮑・サザエ・海老・蛸などは江戸時代から有名になり、江戸の発展とともに三浦は漁業の村として発展していくのです。

新田の開発と農業

江戸時代に入ると農業も発達してきました。その1つとして、三浦半島各地でも新田の開発が進みました。

初声の「入江新田」は、1708年に武山村太田和の山田惣左衛門が開発を始めて、その子の儀左衛門がこれを引き継ぎ、30年もの年月で完成させたものです。詳しい開発の記録は残っていませんが現在の初声小学校のまわりの田がそれで、延長400mの石で根固めした外側土堤と約250mの内側土堤、さらに精進川沿いを2本の土手で仕切ってその内側を田にしたもので、広さは15町歩・石高は22石であったとされています。規模は大きなものではありませんが、完成までにかかった長い年月にその苦労がしのばれます。そのほか「上宮田新田」や「松輪新田」をはじめとして、多くの村で新田の開発が進められたのもこの頃です。



入江新田の位置

（編集委員作成）

また、新しい農機具の使用や、干鰯・下肥・藻草(海藻)などの「金肥」(買ってきた肥料)の使用もさかんになり、農業生産も高まってきました。

一方、商品作物としての特産物の生産もさかんになり、三浦大根のもとになる「高円坊大根」や「三浦木綿」は三浦の特産物として世間に知られるようになりました。

このように江戸時代は、新田開発と商品経済が全国的に進み、そのなかで三浦の農業も大きな発展をしていきました。

外国船の渡来と江戸湾防備

徳川三代将軍家光は、1635年に外国との貿易を制限しました。そのため海外との貿易は「4つの口」でおこなわれ、オランダ・中国とは幕府が直接長崎で、朝鮮半島は対馬の大名である宗氏が、琉球王国とは薩摩の大名島津氏が、アイヌ民族との貿易は松前氏が行うことになりました。

しかし、19世紀に入ると、ロシア・イギリス・アメリカなどの船がたびたび日本各地に来て、国交を強く望むようになりました。これに対して幕府は、外国船の来航に備えて1810年に、白河藩と会津藩に江戸湾入り口の砲台建設を命じました。1811年に会津藩は三浦半島の一部に領地を与えられてその任につきました。そして、走水・浦賀・城ヶ島に大砲台場=「御台場」を築き、城ヶ島には遠見番所を、城山(三崎)や鴨居(横須賀)には領域支配のための陣屋を作って江戸湾警備にあたりました。

『城ヶ島の過去帳』によると、「文化9(1812)年10月18日より安房ヶ崎(城ヶ島)御台場に発火演習始まる。海防にあたる船舶は沿海村名主。水夫は漁夫。その日給二百文。4隻の船の水夫計104人。名主および船主には若干の年俸を給し、帯刀を許す」とあり、当時の海防のようすがうかがえます。また、向ケ崎の大椿寺などには、三崎の地で亡くなった会津藩士やその家族の墓が今も多数残っています。

その後、三浦半島の海防はいくつかの藩に交代でまかされましたが、外国船の来航はやまず、三浦沖にもイギリス船やアメリカ船が多数来ています。そしてそのたびに、海防をまかされた大名は大きな出費を強いられ、近くの村々では人足や船・馬などを提供させられ、大変な負担になっていたようです。

会津藩士の墓(城山)

(三浦市撮影)

このような状況のなかで、幕府は1825年に「外国船打払令」を出しました。1847年には、上宮田(現在南下浦市民センター)に海防陣屋本営と栄町(旧保健所跡地)に分営が作られ、彦根藩や長州藩などがその任務につきました。明治維新の改革に力をつくした木戸孝允や伊藤博文(長州藩)なども、青年時代にこの海防陣屋に衛士として勤めていた記録が残っています。

1853年6月3日(現7月8日)、4隻の黒い艦隊が三崎沖を通って浦賀沖に現れました。沖で漁をしていた漁師が驚いて裸のまま浦賀奉行所に駆け込み、この急を知らせたと伝えられています。この2隻の蒸気船をふくむ4隻の黒船こそ、260年の鎖国を開こうとアメリカ大統領の国書をたずさえてきたペリーの艦隊でした。6月9日(現7月14日)にペリーは久里浜に上陸し、江戸幕府にアメリカ大統領の国書を渡しました。幕府は将軍が病気であることを理由に来年の回答を約束し、会談は30分たらずで終わりました。

翌1854(安政元)年にペリーは再び来日し、神奈川(横浜)で「日米和親条約」が結ばれて日本は開国することになりました。

このように、私たちの住む三浦半島は日本の開国の中心の舞台となったのです。

庶民文化の発展

江戸時代の産業の発達にともなって三崎を中心とする“町”が発達し、庶民文化も生まれてきました。

江戸時代の中ごろには、江戸と三崎近郷の俳人たちとの交流があり、そのためのガイドブックとして、三崎の地誌をまとめた『三崎志』が鶯丘舎草也(本名木村伝右衛門)によって書かれています。江戸時代の画家であり俳人でもある英一蝶(一峰)の「竜の天井絵」が光念寺にあるのも、このような交流関係からでしょう。また、海南神社にある江戸の魚問屋から寄進された天井絵も、当時の江戸の絵師の手によるものです。

海南神社天井絵

（三浦市撮影）

大椿寺杉戸絵

（三浦市撮影）

光念寺天井絵

（三浦市撮影）

＜拝観の場合は要連絡＞

錦島三太夫の墓

（三浦市撮影）

三浦市の各地に残る庚申塔

（三浦市撮影）

現在も続いている若宮神社(初声)の「宮田の相撲」も江戸時代に始まっており、近郷の力自慢が集まってにぎわっていました。半次(下宮田)のバス停そばには、力士から興行元となって当時活躍した錦島三太夫の墓が残っています。三浦市各地に残っている庚申塔も、江戸時代に建てられたものが多くあります。今でも「話は庚申の晩に……」という言い方にあるようにその風習が一部に残っていますが、当時の人たちは庚申講を作って村全体の相談やレクリエーションの場とし、村の願いとして庚申塔を建てていました。このほかにも江戸時代には、今も三浦市で広く行われている稲荷講(イナリッコ)をはじめ、村のまとまりを中心としたいろいろな講が

さかんでした。

＜海南神社＞

（編集委員撮影）

三崎小学校の南にある通称「上の御堂」の下に、「龍潜庵（りゅうせんあん）」という不動堂があります。その境内（けいだい）には２つの筆塚（ふでつか）が建っています。江戸時代のもので、市内で最も古いといわれているものです。市内にはこのほかにもいくつかの筆塚がありますが、これは江戸時代に庶民の子どもを教育した寺子屋で、筆子（ふでこ）（生徒）たちが師匠（先生）の死を惜（お）しんで建てたものでしょう。

また、会津藩は海防の役人を養成するためいなりっこに、三崎に集義館（しゅうぎかん）という学問所を置いたことも記録に残っています。

いなりっこは、農村の豊作祈願をする信仰の一つで稲荷講がなまった呼び名とされ、三崎の海南神社に納されている「面神楽」の影響を受けて、子ども達が面をつけての踊りや茶番劇を披露するようになったものです。

平成 14 年 4 月 1 日、三浦市無形民俗文化財の指定を受け、現在、三浦いなりっこ保存会により三崎の伝統芸能として保存継承されています。

筆塚＜海南神社＞

（三浦市撮影）